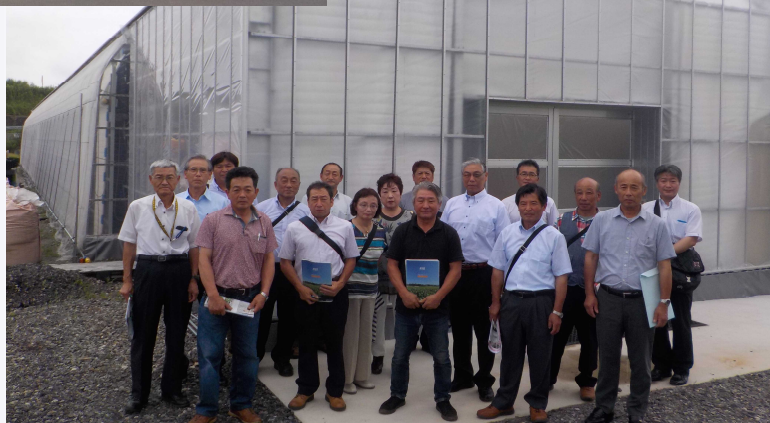


令和元年度 先進地視察研修報告書

令和元年7月16日（火）～7月18日（木）



成田市農業委員会

目 次

1	視察日程及び行程	1
2	位置図	2
3	視察先及び視察内容	2
4	参加者	3
5	視察先の概要	4
6	有限会社 吉川農園	5
7	農業生産法人アネット有限会社	8
8	株式会社くしまアオイファーム	11
9	農事組合法人 きらり農場高木	14
10	視察研修報告書	
(1)	加瀬 雅英 会長	17
(2)	秋山 皓一 第1小委員長	19
(3)	金杉 好男 農業委員	21
(4)	石井 孝和 農業委員	23
(5)	石原 満 農業委員	24
(6)	櫻井 浩子 農業委員	26
(7)	北崎 順一 農業委員	28
(8)	瀧澤きみ子 農業委員	30
(9)	瀧澤 隆義 農地利用最適化推進委員	32
(10)	渡邊 義行 農地利用最適化推進委員	34
(11)	岩館剛三郎 農地利用最適化推進委員	36
(12)	成毛 茂明 農地利用最適化推進委員	39
(13)	高木 信利 農地利用最適化推進委員	41
(14)	根本 武志 農地利用最適化推進委員	42
(15)	土肥 昇 農地利用最適化推進委員	44

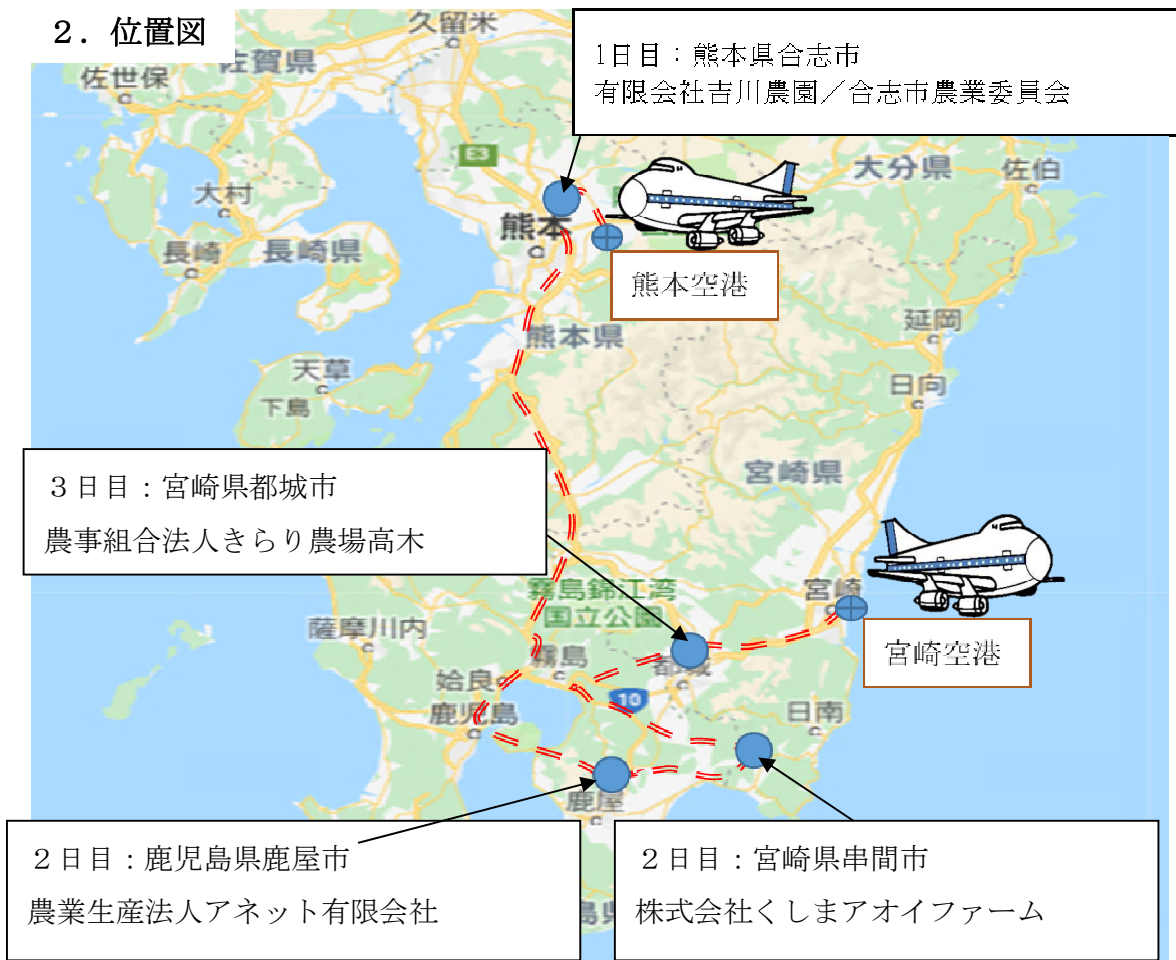
令和元年度成田市農業委員会先進地視察研修報告書

1. 視察日程及び行程

令和元年7月16日（火）～7月18日（木）

日 程	行 程
7月16日（火）	集 合 成田空港 第2ターミナル 連絡バス乗降場 7:10集合 ----- ジェットスター ----- 成田空港 8:45発 熊本空港 10:40着 ホテルエミース（昼食） 12:00発 ＝ 有限会社 吉川農園視察 合志市農業委員会意見交換会 13:15～15:15 ＝ 鹿児島市内ホテル（泊） 18:00着 ※ ホテル ホテルマイステイズ鹿児島天文館
7月17日（水）	ホテル 8:00出発 ＝ 農業生産法人 アネット有限会社視察 10:20～11:50 ＝ 志布志市内（昼食） 12:30～13:30 ＝ 株式会社 くしまアオイファーム視察 14:00～15:30 ＝ 霧島市内ホテル（泊） 17:50着 ※ ホテル 霧島国際ホテル
7月18日（木）	ホテル 8:10出発 ＝ 農事組合法人 きらり農場高木視察 9:30～11:00 ＝ 青島（昼食） 12:10～13:10 ＝ 宮崎空港 14:15着/15:40発 ----- ジェットスター ----- 成田空港 17:25着 解散

2. 位置図



3. 視察先及び視察内容

- (1) 有限会社吉川農園・合志市農業委員会（熊本県合志市）
農業はやり方次第で必ず儲かる
 - ・IT等の活用による経営管理について
 - ・6次産業のビジネス展開等について
- (2) 農業生産法人アネット有限会社（鹿児島県鹿屋市）
供給システム等の研究・開発と経営の安定化
 - ・かんしょ苗の供給システムについて
 - ・6次産業のビジネス展開等について
- (3) 株式会社 くしまアオイファーム（宮崎県串間市）
独自ブランドによる直接販売
 - ・生産・加工・販売の一貫体制について
 - ・6次産業のビジネス展開等について
- (4) 農事組合法人 きらり農場高木（宮崎県都城市）
経営の多角化・複合化
 - ・大規模な団地化形成について
 - ・女性の参画について

4. 参加者 17名

会 長：加瀬 雅英

農 業 委 員：金杉 好雄

農 業 委 員：石原 満

農 業 委 員：北崎 順一

最適化推進委員：瀧澤 隆義

最適化推進委員：岩館剛三郎

最適化推進委員：高木 信利

最適化推進委員：土肥 昇

随 行 職 員：櫻井 哲

第 1 小 委 員 長：秋山 皓一

農 業 委 員：石井 孝和

農 業 委 員：櫻井 浩子

農 業 委 員：瀧澤きみ子

最適化推進委員：渡邊 義行

最適化推進委員：成毛 茂明

最適化推進委員：根本 武志

随 行 職 員：伊藤 裕美

視 察 先 の 概 要

	成田市	熊本県合志市	宮崎県串間市	鹿児島県鹿屋市	宮崎県都城市
市の面積	213.84 km ²	53.19 km ²	295.16 km ²	448.33 km ²	653.31 km ²
市の人口	133,395 人	62,459 人	17,480 人	101,640 人	165,252 人
市の世帯数	62,581 世帯	24,631 世帯	7,760 世帯	45,681 世帯	71,511 世帯
総農家数	2,162 戸	699 戸	1,241 戸	4,115 戸	6,581 戸
販売農家数	1,651 戸	505 戸	957 戸	2,419 戸	3,529 戸
耕地面積	6,590 ha	2,200 ha	3,070 ha	10,200 ha	12,600 ha
田耕地面積	3,860 ha	932 ha	1,610 ha	2,280 ha	6,390 ha
畑耕地面積	2,740 ha	1,260 ha	1,450 ha	7,890 ha	6,240 ha
水稲作付面積	3,260 ha	296 ha	697 ha	1,150 ha	2,970 ha
麦類作付面積	31 ha	57 ha	1 ha	3 ha	5 ha
かんしょ作付面積(H17)	1,300 ha	14 ha	931 ha	2,180 ha	609 ha
農業産出額	2,953 千万円	750 千万円	846 千万円	4,559 千万円	7,715 千万円
耕種産出額	1,698 千万円	324 千万円	386 千万円	1,176 千万円	1,184 千万円
米	381 千万円	34 千万円	73 千万円	119 千万円	347 千万円
麦類	0 千万円	3 千万円	0 千万円	－ 千万円	0 千万円
いも類	793 千万円	10 千万円	122 千万円	264 千万円	247 千万円
野菜	447 千万円	219 千万円	83 千万円	575 千万円	488 千万円
果実	18 千万円	9 千万円	70 千万円	11 千万円	15 千万円
花き	26 千万円	14 千万円	－ 千万円	116 千万円	14 千万円
畜産産出額	1,255 千万円	426 千万円	450 千万円	3,340 千万円	6,507 千万円
肉用牛	10 千万円	121 千万円	315 千万円	1,544 千万円	1,910 千万円
乳用牛	65 千万円	263 千万円	40 千万円	268 千万円	486 千万円
豚	1,070 千万円	37 千万円	48 千万円	1,151 千万円	2,214 千万円
鶏	99 千万円	4 千万円	48 千万円	378 千万円	1,896 千万円

注：人口・世帯数は各市のHPより

農家数は、2015年農林業センサスの数値。

耕地面積は、平成29年面積調査の数値。

作付面積は、平成29年作況調査の数値。

農業産出額は、平成29年生産農業所得統計の数値。

視 察 日 時 令和元年7月16日（火） 13:15～15:15
視 察 先 有限会社 吉川農園 / 合志市農業委員会（熊本県合志市）
対 応 者 代表取締役社長 吉川 幸人 氏
合志市農業委員会事務局長 衛藤 文明 氏
視 察 テ ー マ IT等の活用及び6次産業のビジネス展開等について

1. 会社の設立及びIT等の活用による経営管理の高度化

昭和58年に親の病気のため帰郷し、農業を始め、平成4年に施設・機械を導入するために補助事業を使って法人化を進めた。

平成11年に株式会社青しそ販売会社を起ち上げ、平成18年には施設園芸では日本初となる生産情報公表JAS認定を取得する。平成28年に有機JAS農産物及び有機JAS加工品食品の認定を受ける。

生産から加工・販売・輸出・研究開発・地域貢献などを総合的に担う企業としてビジネス展開を図る。

「農業はやり方次第で必ず儲かる」をモットーに、限られた経営耕地でいかに利益を上げるかを追求し、無駄を無くすため、ICT技術等を活用した栽培管理に力を入れている。データの見える化だけでは意味がない。製品化して売れるものを作らなければならないため、蓄積データを分析することにより、最適な施肥計画や栽培環境を実現し、しそ（大葉）の生産量を増やし、出荷管理にも応用することによって売上向上を図った。

また、「土づくりは基本である」との思いから、緑肥導入の輪作体系を確立し、連作障害の回避に心掛けるとともに、自家製ボカシ肥を作り、有機肥料栽培を実現させた。



（有）吉川農園にて

2. 法人組織とその活動

従業員は約20名おり、週休2日、勤務時間は午前8時から午後5時までで、残業は無し。フレックスタイム制度を導入し、女性にも働きやすい職場環境を実現している。生涯現役として永年雇用も維持しており、昼食会や慰労会を開催し職員間の親睦を深めている。設立当初は休みなく働いていたが、息子の代までには改善しようと思い、頑張って土台を作った。しそ（大葉）や加工品のしそドリンクなどは海外にも輸出し、現地のスーパーマーケットにも卸しているが、一流のデパート等に限定しているこだわりがある。

更なる海外展開を目指して視察や商談を積極的に進めている。

3. 合志市農業委員会 衛藤事務局長と

合志市の面積は約53km²、農業戸数は700戸、耕地面積は2,200ha、平成18年に合志町と西合志町が合併し発足して、施設園芸が盛んな地域で、熊本有機スイカで有名である。

酪農家は後継者が多い。施設園芸や法人化している経営体では後継者も育っている。儲かっているところは後継者もいる。

大きい農家だから後継ぎがいるのではなく、「子供が、後継ぎがいるから規模拡大している。」というのが現実かもしれない。

4. 主な質疑

Q1：加工品と生葉の割合は。

A1：生葉の方が多い。単価の違いからも加工品は難しい。

Q2：冬でも生産は出来るのか。

A2：通年栽培している。冬は重油でハウスを温めている。

Q3：1年間で何回転させるのか。

A3：4か月収穫して、堆肥を混ぜ3か月間寝かせ、半年から1年間圃場は休ませる。

Q4：全圃場に緑肥は使うのか。

A4：圃場によっては使う。畑の地力を上げることに重点を置く。

Q5：合志市に新規就農者は多いのか。

A5：今年は5名程度いる。

Q 6 : 新規就農者は増えているか。又、新規就農者の営農は続いているか。

A 6 : 続いている経営体もあるが、夫婦で始めたがすぐに挫折する経営体もある。農業次世代人材投資資金（旧青年就農給付金）が始まってからは、増えてきた。新規就農する人たちも「ツテ」が無いと良い圃場は借りられない。

Q 7 : 合志市農業委員会会長と職代は農業経営者か。

A 7 : 会長がアスパラとネギを栽培し、認定農業者となっている。職代は酪農を経営している。

Q 8 : 合志市農業委員会で女性委員の登用の仕方は。

A 8 : 県から市長へ女性の登用を要望され、各団体に呼び掛けた。現在、10名中4名が女性。

Q 9 : 女性委員として、何か特別な活動をしているか。

A 9 : 個人では活動している人もいるが、女性委員4人で会を作っての活動はない。



吉川社長を囲んで

視 察 日 時 令和元年7月17日（水） 10：20～11：50

視 察 先 農業生産法人アネット有限会社（鹿児島県鹿屋市）

対 応 者 代表取締役会長 尾曲 修二 氏

視察テーマ 苗の供給システム及び6次産業のビジネス展開等について

1. 農業生産法人アネット有限会社の事業及び6次産業の展開

平成11年4月に農業生産法人として会社を起ち上げ、社員15人、ベトナム人を4人雇用している。

敷地内に事務所及び培養室、1次加工場、試験ハウス等を揃えている。

事務所に併設した培養室では、メリクロン苗を培養する事業所として、さつまいもを50種、いちごを10種生産し、沖縄から北海道まで供給している。いちごはメリクロンで培養したものを長野で育苗するなど国内分業している。

1次加工場では、洗浄したさつまいもやしょうが等を、裁断後乾燥して、チップ状にしたものをそれぞれの会社へ納品する中継ぎ的な事業も展開している。春先は芋苗の培養がメインだが、これからの季節はゴーヤの乾燥チップを焙煎茶の原料にするため台湾に輸出し、しょうがの粉末を健康食品会社へ販売するなど手広く事業を展開している。ゴーヤの加工としては、青果での売れ残りを農家に納めてもらっているのも農家にとってもメリットがある。年間100t位の取り扱いがある。

米麴を使わず100%芋で作る焼酎の原料となる芋麴もアネット有限会社で加工しているとのことだった。ハウス内での農薬散布や、灌水するための細霧設備に欠かせない、先端ノズルにイスラエルの技術を使い、使用後の設備内部に空気を流し、薬剤が残らないようにする特許を取得、販売も行っている。



（尾曲会長による研修）

いちごの育苗システムは、韓国製のものが優れているので採用している。氷点下20度にもなる国で発明された冷暖シートは、とにかく熱が逃げるのを防いでくれるので、冬は燃料代が半分以下ですみ、夏も冷房代がかからない。

ハウスの外被膜にイスラエル製の散乱光フィルムを使用している。熱が蓄積しないため、耐用年数が20年位ある。閉鎖系のオーガニック工場にする予定。

ナノバルブを使い、オゾンを噴出させれば滅菌・消毒ができる。今後出入口にエアーシャワーを設置予定。



尾曲会長を囲んで

2. 主な質疑

Q 1 : ハウス内で使用している噴霧器は、イスラエルの技術がすごいのか。

A 1 : 20～30年前から世界一。主に点滴灌水技術が優れている。

Q 2 : 細霧装置は、温度を下げるための技術か。

A 2 : 温度を下げるためにも使用できる。

Q 3 : 冬場、温度を上げるための技術はあるか。

A 3 : 別の技術がある。

Q 4 : 細霧装置は、散水や灌水も出来るのか。

A 4 : かける圧力を下げれば散水にもなるし、圧を上げれば霧にもなる。

特注で4気圧かけても外れないように改良している。

Q 5 : ハウスの側面に散乱光フィルムを使用しない理由は。

A 5 : 予算を節約している。ハウス側面は開閉できるようにしているため台風対策でもある。

Q 6 : 散乱光フィルムを使用する理由は。

A 6 : 散乱光フィルムを使用すると、光を拡散するため真夏でも作業ができる。表面温度で5度は違う。光合成活性率は3割向上すると言われているが、実際自分で試していないのでこれから試す予定。散乱光フィルムがあれば、寒冷紗はいらない。

- Q 7 : 冷暖シートの耐用年数は。
- A 7 : 10年はもつ。
- Q 8 : 冷暖シートを国内では買えないか。
- A 8 : 現在、国内で売る準備を整えている。
今の施設のものは韓国から輸入した。
- Q 9 : ハウス内の水管理及び空調は全て自動か。
- A 9 : 全ての植物特性に合わせて、自動調整できるようにプログラミング
を開発する予定。いわゆる植物工場。
- Q 10 : このハウスを建てるのに補助事業は使っているか。
- A 10 : 補助事業では規制があるため、このハウス建設には使っていない。
L 資金等利子補給は受けている。
- Q 11 : ベトナムではバイオ技術が進んでいるのか。
- A 11 : まだこれから。勉強したいというなら、研修させてあげるよと
言ったら、すぐに研修生が来た。技術を移転して、ベトナムでも仕
事が出来れば、日本でもベトナムでも雇用が生まれ、お互いに利益
が生じるので、こちらとしてもありがたい。ベトナムとはこれから
だが、インドとは既に技術交流を始めている。桁違いの会社で、優
秀な社員がとても多い。お互いの利権が一致すれば、国内でも国外
でも連携すれば良い。
- Q 12 : インドやベトナムから来る人は、日本語を勉強しているのか。
- A 12 : ほとんど英語での会話だが、ベトナムでは鹿児島県の方が先生とし
て活躍している。そこで半年間勉強してから日本に来る。

視 察 日 時 令和元年7月17日（水） 14：00～15：30

視 察 先 株式会社くしまアオイファーム（宮崎県串間市）

対 応 者 代表取締役社長 池田 誠 氏

視察テーマ 生産・加工・販売の一貫体制について

1. 法人設立の経緯

池田氏が23歳の時に親が他界し、稲作農業の跡を継ぐことになった。稲作農業では、設備投資に費用がかかり利益がでないことから、さつまいも生産1本に絞り、40歳の時に10年計画を立て、地元の地銀から資金を調達することができ、平成25年12月株式会社くしまアオイファームとして法人化。香港と台湾にも海外輸出を開始し、平成26年、国の6次産業化企業として認定を受けて加工品の開発に着手し、国内販売を開始する。海外輸出業者に営業し、海外の人にさつまいもを安く手に入れてもらい、市場を広げるため輸出中心の事業展開とした。

2. 経営組織とその活動

現在、従業員は87名、正社員が55人、研修生及びパートが30人位、平均年齢が33歳。約200か所の農家と契約栽培を結び、生産規模は自社生産が30ha、契約農家は160ha、地元串間市内にとどまらず県外の農家とも契約を結んでいる。

「こえていく」という経営理念を持ち、時代を越え、しがらみを超え、肥えていくという夢を実現させるため、強い農業を未来永劫に続け、今の弱い立場の農家から脱却するというメッセージを込めている。

「モテる大人になれ」という行動指針を掲げ、性別や年齢など関係なく、自分を信じて実践し、それを人にやさしく教えること。頼れる大人になり、人として誰からも好かれるようになれば会社の評判も上がり、自分に給与や賞与として還元される。

農業者以外の若い人材を多く集め、地域の古い風習を反面教師として「世界1の理想の会社を作り、農業をカッコいいに変える」という思いを持って会社を起ち上げ、近くの東南アジアへ輸出していたが、現在は、東南アジアへの輸出よりもドバイやヨーロッパへの輸出の拡大を目指している。

地元大学や研究施設と提携し、さつまいもの新種開発等技術提供を受け、健康サプリメントの開発、未利用資源の活用方法を研究している。

会社の規模が大きくなると社員やパートさんの顔が覚えられないため、「顔ナビ」のアプリを使用し管理している。

1 分単位で残業代を払う方針にしたら逆に残業時間が少なくなった。



大型洗浄機を見学

3. 今後の課題

串間市で農業生産法人は1つだけなので、農地は多く集まってくるが、設備費が規模拡大に伴いかかってしまうため、輸出を中心に販売を伸ばしていく予定。更に10年後には20億の壁を越えていく。

海外、国内で直接お客様に食べてもらえるキッチンカー事業（ポテトラ）の構想がある。

利益率が高い商品開発を進め、会社の基盤を強化する。

世界に目を向けると、飢餓国がまだまだある。タンザニアでは、主食が芋とトウモロコシ。芋だけでも生産量が日本の7倍もあるのに、単収は1/3である。そのため自国消費で終わっている。研究・開発・生産・流通・加工・ブランディング・輸出、トータル的にケアできるような国際貢献ができないかを考えている。日本の農業技術は世界に誇れるもの、輸出できるものと考えている。現在はケニアと交流を始めている。

この工場は、補助事業を使い、国から4億いただいているが、出来ればもらわない方が良いのかもしれない。規制が厳しすぎる。来月、工場内のラインを少し変えるために1,000万円の返還を行った。

4. 主な質疑

Q 1 : 工場内の I C T は社長が考えたのか。

A 1 : 社員の中に専門家がいるので、メーカーと一緒に考えた。

Q 2 : どのように土地は集めているのか。

A 2 : 地主から直接言われる。「タダでもいいから」というところもあれば、
優良圃場は 2 5 , 0 0 0 円 / 1 0 a のところもある。

Q 3 : 洗っているときに出る泥の処理は。

A 3 : 県の指導で「産業廃棄物」にはならないとのことだったので、一度貯
めてから圃場に返している。



工場内を見学

視 察 日 時 令和元年7月18日（木） 9：30～11：00

視 察 先 農事組合法人 きらり農場高木（宮崎県都城市）

対 応 者 代表理事組合長 松原 照美 氏

視察テーマ 経営の多角化・複合化及び女性の参画について

1. 法人設立の経緯

昭和62年に高木営農改善組合を組織し、受託作業等を中心に経営を行ってきたが、①制度上農地を預かることができない。②農産物の生産・販売ができない。③農作業従事者の労働災害に係る救済ができない。④税制面からも限界が見えてきたことから、平成18年に出資型法人設立となった。

現在、構成員数は340人を超え、当初から理事に女性役員を迎え、生活部として加工品の開発及び販売を手掛けている。



きらり農場高木にて

2. 組織とその活動

水稻、馬鈴薯、大豆、さつまいも、飼料作物等の露地栽培やミニトマト等の施設園芸、受託作業など幅広く事業展開をしている。作物別に団地化してブロックローテーションすることにより、連作障害を防ぎ高品質の野菜を生産している。JAを通じ食品会社との契約栽培を結び、安定的な経営を実現している。6次産業の取り組みとして加工品の開発がある。加工用ハウレンソウ、加工用ニンジンの導入により冬場の作業確保に役立っている。女性の活躍の場として加工施設を整備し、みそや郷土料理「がね」、里芋コロッケを作り、JA直売所や道の駅に出品している。

3. 今後の取り組み

法人となったことで農地の取得や利用権設定、農業機械等の更新積立が可能となり、地域農業の担い手として期待されている。更に事業の多角化を図り、農産物の加工、観光農園・体験農業等の運営、研修生の受入など地域活性化の主体となっている。

農業経営だけでは、成り立たないため、国等からの補助金をあてにするしかない。しかし、補助金が減少傾向にあるため厳しい状況。圃場整備・機械の大型化・省力化を図り、経費の削減を目指している。



スライドを使っでの説明

3. 主な質問

- Q 1 : さつまいもの種類は。
A 1 : 黄金千貫、紫まさり、あやむらさきがある。
- Q 2 : さつまいもの買取り価格はいくらか。
A 2 : 高くても 1 k g 当たり 7 0 円。平均は 1 k g 当たり 6 0 円。
- Q 3 : 水稻の後にさつまいもは作れるのか。
A 3 : 出来るだけ水はけの良い所を選んで作付けする。
- Q 4 : 基盤整備は自分たちでやっているのか。
A 4 : 土地改良区が入って基盤整備し、段差や畦畔除去などは委託業者
にお願いしている。
- Q 5 : 1 0 a 当たりの賃借料はいくらか。
A 5 : 1 0 a 当たり 1 5, 0 0 0 円、長期は交付金 1 0, 0 0 0 円を上乗
せし、2 5, 0 0 0 円。短期は集団転作助成金 2 5, 0 0 0 円を上
乗せし、4 0, 0 0 0 円。長期は土地改良費も負担。

- Q 6 : 土地改良費はいくらか。
- A 6 : 7, 0 0 0 円の所が多い。場所によっても変わる。
- Q 7 : 賃金はいくらか。
- A 7 : 男性は1, 0 0 0 円／h、女性は9 0 0 円／h。
- Q 8 : 今年、里芋の疫病はどうだったか。
- A 8 : 大雨で水をかぶり、疫病が出ている。
- Q 9 : たい肥は何を使っているのか。
- A 9 : 牛糞がメイン。全面散布している。
- Q 1 0 : 水稻の反収はどのくらい。
- A 1 0 : ヒノヒカリという品種がメインで、反収5 0 0 k g 位。
おてんとうそだちが5 5 0 k g 位で、酒米は6 0 0 k g 位。
- Q 1 1 : 苗は自作しないのか。
- A 1 1 : コスト面から自作しない。J A で一括して買った方が安い。
5 0 0 円／箱。
- Q 1 2 : 人件費が多いのか。
- A 1 2 : 工賃が4 0 % 位を占めている。
- Q 1 3 : ボーナスはあるのか。
- A 1 3 : 慰労金として年2 回支払いをしている。
社員には社会保険や年に1 度の慰安旅行をしている。昨年から月給制を敷いているが、事例が少ないため難しい。休みは日曜・祝日だけ。祝日に出てもらった日は振替として雨の日に休んでもらう。
- Q 1 4 : 収穫時にパートとして7 0 名雇うとのことだが、どうやって集めるのか。
- A 1 4 : 半分は近所の方々に、残りは求人広告や派遣会社から集める。



高木地区の集積状況

令和元年度 先進地視察研修報告書

成田市農業委員長 加瀬 雅英

今回の視察研修は、熊本県・宮崎県・鹿児島県と3県4か所を訪問し、研修して参りました。

吉川農園（熊本県合志市）

社長の吉川氏は、「農業は、やり方次第で必ず儲かる」をモットーにしその生産・加工・輸出を行い、自信に満ち溢れた方でした。

生産した作物は、すべて販売・加工し、無駄にすることなく、すべてを活用していました。また、働きの良い人には、高い賃金を払い、目配り・気配りを怠らず、高みを目指し日々努力して、農業委員も務めておりました。

成田市同様、畑作地帯での集団化は難しく、進んでいないとのことでした。

アネット有限会社（鹿児島県鹿屋市）

さつまいもとイチゴのフリー苗・切り苗・ポット苗の生産販売、さつまいもの栽培、さつまいも・生姜・ウコン・ごぼう等の加工（粉末・カット・スライス等）後、原料として販売を主に行っている会社でした。

ハウス内での苗の生産及び増殖の方法や点滴灌水、設備、保温・断熱シートなどとても参考になりました。ハウスの資材の多くは、韓国製が多く、技術的にかなり進んでいるとのことでした。

また、他方では、ベトナムとの技術協力など先を見越した動きをしているようでした。

数人の方々に「成田市は良い。素晴らしいところに住んでいて、羨ましい」と言われました。また、アネット有限会社の社長からは、「友人が成田市のイチゴ団地の設計に関わっている」との話がありました。

地元の間人は、地の利を活かせず、農業の抱えた負のスパイラルから抜け出せないというこの状況を思うと辛いものがありました。

くしまアオイファーム（宮崎県串間市）

自社農場及び契約栽培を推進し、5品種を国内・海外に販売しているさつまいも中心の会社です。社員方々も礼儀正しい方ばかりで、出荷調整の設備もラインの流れも「素晴らしい」の一言でした。柔軟な発想に基づき、商品開発や経営を行うエネルギッシュな会社でした。

ゲノム編集らしき方向にも取り組み、新品種の育成にも挑戦しているそうです。



さつまいも栽培の様子 くしまアオイファームHPより

きらり農場高木（宮崎県都城市高木町）

地域の高齢化及び後継者不足が深刻化し、耕作放棄地が増えたことにより、必要に迫られて、農事組合法人を設立したとのことでした。

水稻・馬鈴薯・大豆・飼料用作物・さつまいもなど種類を多く栽培し、頑張っているとのことでした。

しかし、数年前に視察した集落営農と同様で、補助金頼みの経営であり、この補助金が無くなったら、この法人は終わりだとも言っていました。

農地の集団化・集落営農・JAとの深い絆は素晴らしく、明るさがあるように思えました。成田市でも必要な取り組みを行っている法人であるように思えました。

一方、畑作では、さつまいもの栽培・加工・輸出を行っていたり、他方では、フリー苗の生産販売、さつまいもの栽培、加工販売を行っている方々を視察して、成田市とは違う強い力を感じた3日間でした。

先進地視察に参加して

成田市農業委員第1小委員長 秋山 皓一

有限会社 吉川農園について

当園は、都市化の進む合志市で、平成4年に限られた面積でいかに収益をあげられるかを目標に設立された会社である。

現在、しそ2ha（耐候性ハウス）を主要品目として、生産・加工・販売のほか、普通畑11ha、果樹3haを作業員約20名（フレックスタイムあり）で、勤務している。特に、しそ栽培においては、ICTを活用することにより、安定生産、経営管理の高度化が実現されている。

自分で作ったものを自分で値段を付けて、より高い購買力のある客層をターゲットとした一流のデパートや専門店を通じて販売している。誰でもが容易に買えるという販売はしないとのこと。

吉川代表の話で、サラリーマンを辞め、就農して、まず、感じられたのは、「畑作は水田と比べ、国・県などからの補助金が皆無に等しい」ということだったので、会社を設立したのが発端とのことでした。

合志市農業委員会との意見交換会

事務局長、吉川農業委員2名との話し合い

農地集積について、都市化の中、進まない。

推進委員の会議への参加がある。

後継者問題については、経営基礎のしっかりしている農家にはある。

特に、農地集積については、どうすればいいのかと問われました。

どの地域においても抱える問題は、大同小異なのかと感じました。

アネット有限会社について

当社は、鹿児島県鹿屋市にあり、種苗と加工の2本立ての会社。

種苗は、さつまいも・イチゴのフリー苗の生産を行っており、培養室などは、見学できませんでした。加工は、さつまいも・生姜などを1次加工し、それを次の業者に渡すというもので、現在、稼働はしていませんでした。隣接のハウス（1棟）は、新しい技術が導入されていました。当施設や周辺農地などを見る限り、活力は感じられませんでした。

(株) くしまアオイファームについて

当社は、宮崎県串間市にある青果用さつまいもに特化した事業を展開する。
さつまいもの生産・加工・販売を一貫して行い、宮崎県という立地を活用している企業である。

工場面積 1.4 ha、施設には 1,500 t 以上貯蔵が可能な貯蔵庫があり、
通年販売を実現し、他の部門においてもデジタル、IT化されている。

自社農地 30 ha、契約農家 100 軒がある。

従業員は 85 名（パート 30 名）平均年齢 33 歳

販売先は国内をはじめ、東南アジアを中心とした海外進出に力を入れている。
海外輸出量が 3 割を占め、数年のうちには、5 割を目指すとのことだった。
代表者の池田氏の先見性、情熱に感動させられたひとときでした。

農事法人きらり農場高木について

当法人は、平成 18 年に都城市高木地区で生産を営む農家により、設立された集落営農型の法人である。

農地集積は、平成 30 年、87%を達成している。

農住地の位置関係は、地域の中心に居住地があり、これらを取り巻くように農地があるという形で、これらの水田をブロックローテーション化し、水稻・馬鈴薯・大豆・さつまいも・飼料用作物を効率的に作付けしている。

収益等について話を聞く限り、補助金を有効的に活用されていると思われるが、補助金が無ければ、経営は難しいと言われたことが印象に残りました。

本研修を通じて、感じたことは、先進地とはいえども、農地・農業を取り巻く諸問題は、共通していると感じられました。

先進地視察研修に参加して

成田市農業委員 金杉 好男

1 日目 熊本県合志市の有限会社吉川農園においては、平成 4 年 1 1 月に設立され、「農業はやり方次第で必ず儲かる」をモットーに限られた経営耕地でいかに利益を上げるかと迫及し、しその生産・加工・輸出に取り組んでいる法人です。私の感覚では、しそで商売になるのかと思っていましたが、I T の活用により、生産量 7 %、販売額 3 5 % 向上したとのことでした。

2 日目 農業生産法人アネット有限会社

成田市でも導入して一般的になっているさつまいものメリクロン苗を低コストで安定生産・供給するシステムを確立していて、平成 2 8 年度には生産出荷本数が 7 6 万本でネット販売しているそうです。また、下位等級品を使い、6 次産業化にも取り組んでいるとのことでした。

次に、株式会社くしまアオイファームを視察しました。宮崎県串間市でさつまいもの生産・加工・販売を自社で一貫して行い、青果用さつまいものに特化し、自社農場に加え、契約栽培にも取り組み、安定した生産体制で独自ブランド化し、国内外の輸出に取り組んでいるとのことでした。

平成 2 2 年から市場出荷から直接販売に転換し、中間のマーゲンを省き、販売価格と契約農家に利益還元を両立しているそうです。

消費者ニーズにも応え、食べきりサイズの小型のさつまいものを商品名「おやついも」を開発したところ、手頃な価格が支持されており、同社の主力商品となっているそうです。

また、日本産のさつまいもは、安心安全のイメージがあるため、海外でも評価が高く、現地で対価販売を実施してきたとのことでした。この販売促進方法は効果が大きく、生産者と消費者の顔が見えることの安心感が伝わるのではないかと思います。

海外需要の高い小ぶりのサイズのさつまいもを栽培する「小畦密植栽培法」の開発や九州で唯一キュアリング機能を持った貯蔵施設を建設されたことで、周年出荷が強化され、輸出増に繋がったとのことでした。

現在、成田市のさつまいもは系統出荷が 9 割、加工 1 割の市場第一主義であるが、くしまアオイファームの前身を見ているようです。しかし、現在、大栄地区に建築中の集出荷場においては、買取り 5 割・委託 5 割を目標にしていくとのことだったので、高齢化対策に期待していきたいと思っています。

3日目 農事組合法人きらり農場高木

宮崎県都城市高木地区で高齢化や後継者不足、耕作放棄地の増加といった問題に挑み、安定した生産量確保を実現させて、農地の拡大をし続けている。

松原照美組合長の話を聞いて感じたことは、その地域をまとめるには、その地域のリーダー的人物が必要不可欠であり、信念と情熱で共感させられ、経済的にも労働力的にも充実できなければならないと思いました。



じゃがいもの収穫の様子 きらり農場高木HPより

令和元年 先進地視察研修について

成田市農業委員 石井 孝和

7月16日から18日にかけて、熊本県、鹿児島県、宮崎県へ先進地視察に行って来ました。

最初に吉川農園では、シソの葉はもちろん、実・茎まですべて加工して販売するという、販売先を開拓するため積極的に商談会に参加しているということ、自分で価格を決め自分で販売先を探すということに関心しました。

次に農業法人アネット（有）に行きました。

ここは、イチゴ・さつまいもの苗の生産とのことですが、時期的に生産はされておりました。

新しく出来た生産施設を見学しましたが、省エネを考えた施設とのことでした。

くしまアオイファームは、さつまいも専用農場で、自社農場と契約農家で100ha以上さつまいもを生産し、国内・海外にも出荷しているとのことでした。

巨大な貯蔵庫で温度・湿度が管理され、1年中出荷されているとのことでした。施設が巨大すぎて個人の力では無理ですが、成田市も高齢化・農家数減少を考えれば農協を中心に、くしまアオイファームのような施設の導入も考えてみるのも良いのではと思います。

今回の視察の中で1番印象に残っているきらり農場高木では、上手く土地利用が出来ているように思いました。

水田地帯なので、ジャガイモやさつまいもの畑作物の栽培は、天気に影響されるように思いました。

今回の視察で、各組織とも上手く機能していると感心しました。

規模的に大変大きなところばかりだったので、もう少し小規模なところで生産活動に励んでいる農業者も見学したいと思いました。

南九州農業視察に参加して

成田市農業委員 石原 満

今回、南九州の農業法人４事業所を２泊３日の行程で視察、熊本空港からの車窓は、田植え直後や間近の水田が散見され、南国九州に来たことを実感しました。

１日目の視察場所、大葉を生産出荷している「吉川農園」では、女性数名が大葉の袋詰め作業をしていた。吉川社長からは、そのまま出荷できない商品は、千切りなどの加工をし、付加価値を付けて出荷するとのこと。

有機農業に力を入れ、土の栽培力を養い、年間を通じて出荷しており、冬季は暖房費が経営に大きな負担があることなどの説明があった。

ハウスは、幅１５ｍ、長さ８０ｍくらいが十数棟事務所に隣接していた。

立地的には、住宅地が間近に迫り、廃産物の処理や税制面で新たな負担が生まれてくる。

同席した地元農業委員会事務局長からも農業者年金や集約農業についての話があった。

２日目の事業所「アネット」は、さつまいもの加工・品種改良・輸出を手掛けており、出荷できないものは、米粒大に加工し、付加価値を付けて、酒用として出荷している。

最新の断熱遮光機能を持ったハウスでは、韓国からの輸入イチゴ育苗機を組み立て中で、今後は、イチゴ苗の商品開発をするとのことだった。苗は、自社保冷施設ではなく、長野県に送るとのことであった。

昨日、並びに本日視察した両社は、生産したものから、いかに多くの商品を生み出し、廃産物を少なくするかということに知恵を絞っている。

午後の視察場所「くしまアオイファーム」は、さつまいもの自社生産に農家からの契約買い付けをし、最新機能の巨大な保冷库を複数所有。年間を通じ、販売を可能にした。庫内には、昨年収穫したさつまいもが山のようにパレットで積み上げられていた。さつまいもの自動洗浄機は、皮に傷を付けずに洗っていたが、とれたてのさつまいもは、他の機械で洗うとのことであった。従業員80名を超え、年商11億円を1代で築き上げた農産品加工販売の大企業であった。

企業者である現社長池田氏は、幼少期恵まれず、努力と根性、恵まれた知性で大きく開花した。現在、日本人の最も好むすべてを持ち備えた社長であった。

収穫作業中のさつまいも畑、穂が垂れ収穫間近の水田、耕作放棄の畑、葉タバコの栽培などが帰りの車窓に見られた。

3日目は、農事組合法人「きらり農場高木」で、当法人は、平成18年に設立された。現在、203haを343名で、主に、水稻・イモ類・葉物・大豆を栽培しているとのことであった。

立地は、住宅地の周囲にあり、近くに県農業改良普及センターやJAがあり、それぞれが協力し合い、収益を食い合うのではなく、地区で分け合うという法人であった。従業員も出資者がほとんどで、高給ではないが、月々の給与、年2回の賞与も出ている。雨天時の仕事をどうするかが、今後の課題だと話していた。

今回の視察にあたり、一人の感性で大きく発展した事業所は、次代の人員まで考慮しなければならないのではないだろうか。

成田には、「きらり農場高木」のようなシステムが必要となるのではないかと考えられる。



きらり農場高木にて

令和元年度 先進地視察研修報告書

成田市農業委員 櫻井 浩子

去る7月16日から2泊3日の日程で、九州3県へ視察研修に行ってきました。

今回の研修目的は、様々な賞の受賞歴をもつ法人の取り組みや組織の成り立ち、集積の方法を知ることでした。

●熊本県合志市 (有) 吉川農園

「農業は、やり方次第で必ず儲かる」をモットーとしていました。

全ハウスICT技術を使用して、しその栽培管理に力を入れ、小麦を作り、しそうどんやそうめんを自社で加工し、ジュースは委託しているとのことでした。海外にも大葉とともに輸出しているそうです。生産物に自由に値段を付けることが魅力とのことでした。

●鹿児島県鹿屋市 (有) アネット

さつまいも50品種といちご10品種のメリクロン苗を全国に供給していました。また、イスラエルで開発されたという日本初の自動噴霧装置により、農薬・液肥を自動化することで、労働力が12分の1になるという近代的なハウスに感銘を受けました。全国に資材を提供したいとも語っていました。

体に優しい農業は理想的だと思います。

●宮崎県串間市 (株) くしまアオイファーム

5品種のさつまいもを自社20haと広い範囲での契約農家100軒で生産しており、加工・流通・輸出まで行っているそうです。

まず、さつまいも1,200tが貯蔵可能な貯蔵庫と日本一のさつまいも選果場を視察し、洗いから出荷まで近代的な設備による見事な流れ作業に関心しました。また、若い社員の方々の笑顔と礼儀の良さが心地良く、「社員の顔は、会社の顔」という社長の言葉も納得でした。

現在の輸出割合40%を将来的には約100%にしたいという。そのため、小ぶりのさつまいもを栽培するために「小畦密植栽培」を行ったり、また、輸出には船輸送のため、日数を要しますが、「腐敗を防ぐ専用袋」を開発するような多才な人材が揃っていました。

情熱的な社長と若さ溢れる社員のチームワークでさらに成長する会社であると確信しました。成田市は、串間市以上に好条件が揃っているので、成田市の農産物も近い将来、世界に輸出されることでしょう。そのためにも若い後継者を育成することが課題だと思いました。

●宮崎県都城市 農事組合法人「きらり農場高木」

地域の農業・農地は、地域全体で守ることを目的とし、遊休農地ゼロを推進して、また、耕作のしやすさを追求するため、水田の畦を取り払って大規模な水田にすることや農地を交換するなどしているそうです。

水稻・大豆・じゃがいも・さつまいもなどの作付けについては、ローテーションを組んで効率的に農地の活用をしていました。販売先は、JAだけとし、JAとの太いパイプと補助金で経営が成り立っているとのことでした。

また、加工施設「きらり夢工房」を設立し、女性が輝ける職場であるとのことでした。

成田市の旧下総地区においても、法人・営農組合と組織はありますが、まだ少ないと思う。今後、地域を担うリーダーが必要だと思いました。

3日間、暑い中での視察研修でしたが、生産から6次産業と農業に対する情熱と知恵があり、社員への優しさや気配りが感じられました。

成田市もたくさんの取り組む課題があります。農業委員として、微力ながら尽くしていきたいです。

また、私個人も自分のスタイルでもう少し農業を楽しみたいと思います。

今回は実のある視察を提案して頂き、ありがとうございました。

先進地視察研修レポート

農業委員 北崎 順一

九州という遠隔地のため系統組織の強い地域であると思っていたが、その中で起業して、独自の路線を確立している農業法人3か所と大規模集落営農組織を1か所視察させて頂いた。

視察先1：(有) 吉川農園

青じそ・赤じその生産・加工・販売に特化した会社。大葉は、平成半ば、農薬使用が問題になった頃、農薬漬けのイメージのある作物であった。その反動として、千葉県でも安全・安心な大葉生産が増加したと記憶しているが、農産物では、比較的、珍しい「生産情報公表JAS」を施設野菜では日本で初めて取得している。有機JASの認定は、比較的遅く、平成28年である。G-GAPに準拠した働きやすい環境整備をしているが、敢えて認証は取得していない。代表曰く、認証料が高く、利用価値は無いとの見解であった。昨年には、HACCPに対応した加工場を建築している。

吉川代表は、農業委員も務め、情報を積極的に収集しながら、農地中間管理機構を活用して、経営耕地を拡大するとともに、地域の営農改善組合の設置により、耕作放棄地の解消や担い手不足の改善を主導している。

大葉2ha、大豆8ha、大麦9.5ha、栗1.5haと経営の多角化を図っている。

視察先2：農業生産法人アネット有限会社

さつまいもとイチゴのメリクロン苗（ウイルスフリー苗）の生産販売を行っている。さつまいもは、50品種以上を扱い、インターネットで販売をしている。

以前、私も「安納芋」のフリー苗を購入したことがあるが、他社と比較して扱い品種の多さに驚いた記憶がある。イチゴは、すべて農研機構作出の品種で四季成りも含まれており、どれだけ普及しているかは疑問である。作出した苗は、分業方式により長野県で育苗しているとのことだった。

メリクロン苗作出施設を見学できるのかなと期待していたが、見学できたのは、韓国企業とタイアップして建設した、完工したばかりのフリー苗増殖施設であった。競合他社の多い苗生産より、6次産業が中心になっているように感じられた。国内分業、国際分業に力を注ぎ、さつまいものダイス生産やゴーヤ

のパウダー等受託生産をしているとのことであった。ビニール被覆等簡易な物が多く、コストを抑えているように思われた。

視察先3：(株) くしまアオイファーム

J A串間市大東農協は、「宮崎紅」(高系)をブランド化している早堀産地である。当ファームは、家族経営から2013年12月に法人化し、短期間で驚異的に販売量、売上高を伸ばしている。

千葉や茨城に比較すると大消費地から遠いという不利な立地条件を逆手に取り、輸出に活路を見出している。年間取扱量5千トンの内、17年7月から18年8月の輸出量は1,200t、輸出額3億の実績である。現在の自社栽培面積20ha(契約栽培は160ha)を3年後には100haまで拡大するという計画である。

千葉や茨城にも大規模なさつまいも集荷、販売業者は多々存在するが、経営者の理念を強く反映し、急激に規模を拡大している法人は珍しい。従業員85名中、正社員55名、平均年齢33歳である。若い人材を集めるのに、あえて農業者は集めていない。新しい考え方を取り入れるためのようである。

また、契約農家をM&Aにより社員にして、現在は4名が社員として働いている。

新しい低温貯蔵庫では、さつまいもが1,200t貯蔵可能とのこと。ヤンマーの新しい洗浄・選果施設が稼働しており、画像処理で生のさつまいもと焼き芋の糖度が表示されるシステムとなっている。7月の「宮崎紅」の泥付きさつまいもの買取り価格は、1kgあたり100円前後で委託農家にとっても比較的有利ではないかと思われた。あえて2S程度の小芋を生産・販売をしている。

3か所の先進的な視察先で感じたことは

1. 経営者としての資質・先見性があり、情熱がある。
2. 補助事業、資金、ICTを有効的に活用している。
3. 6次産業化に特化している。
4. 輸出に活路を見出している。
5. 人的ネットワーク化に卓越している。

である。立地条件では、成田市は、これらの法人と比較すると有利な点が多い。農業で活路を見出すのは、やり方次第であるということを改めて感じられた。地域の後継者にこのことを伝えていきたい。

令和元年度 先進地視察研修について

成田市農業委員 瀧澤 きみ子

7月16日 （熊本県）有限会社 吉川農園

平成4年11月に設立されたこの農園は、「農業は、やり方次第で必ず儲かる」をモットーにしその生産・加工・輸出に取り組んでいました。

この地域は、台風被害などが多く、耐候性ハウスを導入し、モニターや計測センサーにより、栽培管理を実施し、収益の向上やコスト削減により、休日も取得でき、女性も働きやすく、高齢の方も働いているそうです。

7月17日 （鹿児島県）アネット有限会社

平成11年4月に設立され、知恵と技術により、ウイルス病に強く、無菌状態で栽培されたさつまいもメリクロン苗を供給していました。

また、6次産業も早くから手掛けられ、焼酎用のさつまいもダイスや生姜パウダー、チップ、フレークなどの原料も供給、輸出にも力を入れていました。

私達、成田市民は、成田空港があり、大消費地である東京にも近くので、研修先の方には羨ましがられました。



アネット有限会社にて

7月17日 （宮崎県）くしまアオイファーム

社長は、49歳の池田誠さんで、「強い農業は超えていく」をスローガンに農協やその地域ならではの閉鎖的確執を乗り越えて、5年前に青果用さつまいもに特化した会社を起ち上げました。契約栽培農家100軒を自社農場に取り入れ、1,200tのさつまいもを収納できる貯蔵庫を有し、5品種のさつまいもを年間を通して国内流通はもとより宮崎県という立地から逆転の発想で、アオイをアジアの拠点として力を入れているそうです。85人いる従業員の平均年齢が33歳、若さみなぎる職場でした。強いリーダーが、その地域を活性化させているのだと思いました。

7月18日（宮崎県）農事組合法人きらり農場高木

宮崎県都城市高木地区で生産を営む農家により、平成18年に設立されたそうです。農家の高齢化と後継者不足に悩む地域の農業を地域全体で取り組んでいるそうです。

都城市高木地区は、霧島山系、東は鰐塚山系に囲まれた都城盆地のほぼ中央にあり、標高130m程度に位置する平坦な水田地帯で立地条件や交通条件の良さから今後の発展が期待されているそうです。

今回の視察研修で感じたことは、畑作と水田地帯の違いはあるけれども、きらり農場高木さんの取り組みは、私達が学ぶべきことが多いのではないかと感じられずにはられません。

九州に行って、改めて感じたのは、成田市の立地条件の良さです。大消費地の東京から近く、成田国際空港もすぐそばにあるという恵まれた地域であることを考える良い機会になりました。

令和元年先進地視察研修について

成田市農地利用最適化推進委員 瀧澤 隆義

7月16日視察初日、熊本県合志市にある吉川農園を訪問した。

大葉を生産・加工・輸出に取り組んでいる。社長の吉川さんのモットーは、「農業はやり方次第で儲かる」ということだったが、正直、大葉で儲かるのかと半信半疑だった。

ハウスにモニターカメラや計測センサーを設置し、モバイル端末でデータや生育状況をリアルタイムで監視し、栽培管理をしている。パソコンも出来ない私にとっては、尊敬の一言に尽きる。

職場の環境も女性従業員が働きやすいように施設を整えているという話もあった。そして、社長の息子さん達も一緒に働いているそう。

「次の世代のために、投資は惜しまない」という社長の言葉は、この環境だから後継者が育つのも頷ける。



しそ栽培の様子 吉川農園HPより

7月17日視察2日目、鹿児島県に入り、2日目最初の視察地、農業生産法人アネット有限会社に訪問した。さつまいものメリクロン苗を安定生産し、低コストで供給している。こちらも6次産業に取り組んでおり、苗の生産とは別に、さつまいも・生姜・ごぼう等を乾燥し、フレークやチップ、パウダーなどに加工し、販売をしている。この取り組みは、農林水産大臣賞を受賞しているとのことだった。

7月17日視察2日目の2件目の視察地、宮崎県にあるくしまアオイファームを視察した。こちらは、100軒ほどのさつまいも農家と契約を結んでおり、生産・加工・販売までを一貫して行っている。販売は、国内に留まらず、東南アジアを中心とした海外輸出にも力を入れている。

担当者に工場内を案内され、洗浄・選別・袋詰め・箱詰めと進む工場内は、女性の社員が多かった。そのせいか、工場内は整理整頓されており、とても綺麗だった。

そして、デジタル掲示板に発注数や出来た数などが表示される。これも頑張れる目標の一つではないかと思う。

工場内を一通り見学し、最後に社長の話が聞けた。なかなかのイケメンの若手社長だった。女性社員が多いのも頷ける。

契約農家を対等なビジネスパートナーとして共に成長するため、情報の共有、そして、自分達が生産したさつまいもがどのように評価されているのかを知るため、海外の展示会に行くこともあるとのことだった。

とにかく農業が儲かれば、農業者が減少している負のスパイラルから抜け出せるという話だった。

それから県内の若手デザイナーと提携し、さつまいもを女の子のアニメキャラに見立てて、幅広い客層に広げたいとのことだったが、私は「これはオタクの人向けかな」と思った。今回は、詳しい話は無かったが、移動販売車も製作中のような話だった。

とても発想が豊かで、どんどん新しいことに挑戦するイケメンやり手社長でした。

私も元々はサラリーマンでしたが、実際、農業をやってみて、後継者がいなくなるのも分かる。自分の息子達2人もサラリーマンをしている。

今回の視察場所は、どこも6次産業に取り組んでいる。そして、後継者が一緒に働いている。これなら後を継ぎたいと思うのも納得でした。

成田市農業委員会先進地視察に参加して

成田市農地利用最適化推進委員 渡邊 義行

7月16日 有限会社 吉川農園

熊本県合志市で大葉の生産・加工・輸出に取り組んでいます。

平成4年11月に設立し、「農業はやり方次第で必ず儲かる」をモットーに限られた経営面積で、いかに利益を上げるかを追求していました。

全ハウスにモニターカメラ・計測センサーを設置し、出荷調整には、自動選別システムや高速選別機などを導入していました。また、取引先の拡大や作業人員を減らすなどの取り組みを行っていました。

生葉の販売を主体として、加工、それから輸出まで行うことで、これだけの利益を上げるのは素晴らしいなと感動した。

7月17日 農業生産法人 アネット有限会社

鹿児島県鹿屋市で、さつまいものメリクロン苗を低コストで安定供給し、6次産業化で、さつまいも・生姜・ゴーヤなどをチップ・パウダー・ダイスに加工することも手掛けておりました。

時期的に苗の生産現場は見る事が出来ませんでしたが、ハウスは最先端の資材等を使用するなど安定生産のために色々な技術を導入していることが勉強になりました。

7月17日 株式会社 くしまアオイファーム

宮崎県串間市でさつまいもの生産・加工・販売を自社で一貫して行っている会社を視察しました。

自社生産の他、契約農家も100軒あり、さつまいもだけで規模拡大が出来るのは、素晴らしいと感じた。

国内だけではなく、海外へもたくさん出荷しており、社長も含め、若手が活躍するなど益々成長していくように感じました。

私もさつまいもの生産農家として大変勉強になりました。



くしまアオイファームにて

7月18日 農事組合法人きらり農場高木

宮崎県都城市高木地区で生産を営む農家で設立された集落営農組織でした。

後継者不足や耕作放棄地の増加問題を抱える中、地域農用地を一括管理し、運営をしていました。水稻を中心に加工用馬鈴薯・焼酎用さつまいも・里芋・大豆・他野菜を生産していました。

構成員も多く、集落営農法人としては、とても大きな組織と感じられた。

3日間の先進地視察を終え、どこの地域も後継者不足や耕作放棄地問題などを抱える中、やり方次第では収益を上げられ、経営していけることが分かりました。

成田市でも水田地帯・畑作地帯で、環境は違いますが、努力次第では状況も変わっていくように思います。

最後になりますが、視察研修に参加された事務局の方、農業委員、推進委員の皆様には大変お世話になりました。とても有意義な研修となりました。

ありがとうございました。

令和元年度 成田市農業委員、推進委員先進地視察研修報告書

成田市農地利用最適化推進委員 岩館 剛三郎

7月16日 初日、熊本県合志市 有限会社吉川農園を視察し、青・赤しそを主に生産・加工・販売している会社。社長は、60代半ばで平成4年に会社を設立し、当初は、朝から夜遅くまで仕事をして、軌道に乗せるため、並大抵ではない努力をされてきたと思われる。

しそは、ハーブと同じく薬効があり、漢方薬にも使われている。

生産・加工・販売は、家族と従業員でICT活用、圃場管理システムを充実させ、拡大している。

販売内容は、葉はパウダー状の調味料として、そば粉に入れてしそ蕎麦、茎は青・赤ともに食品着色剤に、実は油を取るなど捨てる場所は無いという。

特に、土づくりは地力活性のため、自家製ボカシ肥をつくり、土着菌を利用して、秋冬にかけては、山から落ち葉を集め、米ぬか・油かす・漁粉・骨粉・貝化石・しそエキスを加えて混ぜ、発酵させたものを元肥に使い、無農薬・無化学肥料栽培をしている。

視察した時もハウス内に青じそが栽培されていて、2～3m間隔に捕虫シートが下がっており、かなり捕虫されていた。

従業員は、地域の人だけではなく、研修生としてミャンマーから2人の女性や老若男女を雇用し、地域の活性化に役立っている会社である。

社長は、なお商品開発を行い、安心安全な農産物を国内外へ供給していくそうです。



しその自動選別機 吉川農園HPより

2日目 午前、鹿児島県鹿屋市のアネット有限会社を視察し、平成11年より農業生産法人を設立。この会社は、メリクロン苗を主に生産・販売・加工して、地域の農家と委託栽培も行い、規模拡大をしている。

従業員は12名で、さつまいも50種類・生姜・ごぼう・大豆・いちご・ゴーヤと多種類の作物を苗から生産・加工・販売を手掛け、全国へ苗の販売も行っている。生姜は、無農薬・無化学肥料で栽培し、健康食品の会社へパウダー・搾汁液・乾燥チップ・ペーストなどにして供給し、健康嗜好の現代には打って付けの商品になると思われる。

また、メリクロン苗は優れた遺伝子を持っているため、国内はもとより海外でも称賛する国が多く、特にインドや東南アジアの国々には、社長が販路を拡大して海外へ技術の提供・受け入れも考えているとのことだった。

視察した際、新たに1,000㎡以上のハウスを建築中で、冷暖房完備であり、資材は韓国から輸入し、日本には無い資材で品質が良く、費用が安く済むそうです。今後も育苗の管理システムを充実させ、低コストの規模拡大を行い、安心・安全の農産物を提供していくそうです。

2日目 午後、宮崎県串間市のくしまアオイファームを視察した。社長は49歳、代々さつまいも農家で、平成25年に法人化した。

売り上げは10億円で、そのうち3億円は輸出によるものとのことだった。

栽培面積は、160haの串間市以外にも他県、他市にも委託栽培があり、85名の従業員がおり、給与は基本給プラス能力給とのことだった。

この土地は、しらす台地で、他の作物は作りにくい土壌で、社長が農業を始めた当初、9割は農協へ出荷していた。その後、自分で作った作物を自分で値段を決めて売りたいと思い、関東地方へ販売したが、千葉・茨城に比べてコストが高くなってしまったため、海外へ目を向けることになったという。事務所・工場の面積は1.5ha程、貯蔵庫が西日本最大級で1,200tを保冷できる。

収穫されたさつまいもは、各農家・栽培地・品種をバーコードに打ち込み、出荷から店頭に出るまですべて分かり、一年中出荷できるように温度・湿度を管理し、さつまいもの傷も自然に治癒して、管理をデジタル化している。生産履歴管理システムを徹底して、通年販売し、輸出には結露防止の専用袋を開発・実用化して、品質維持にあたっている。

また、宮崎大学と共同研究して、種イモに放射線を当て、優良な苗を取り出して、培養・栽培して、良い結果が出ているとのことだった。

今後の経営方針は、栽培面積の拡大、輸出国を増やし、国内トップクラスのさつまいも選果場を建設予定だそうです。くしまアオイファームの工場内の視察をして、従業員の挨拶と対応の良さには驚かされました。

3日目 午前、宮崎県都城市にある農事組合きらり農場高木で、理事長から説明して頂きました。

経営面積は270ha、作業受委託を合わせると634ha、水稻・大豆・じゃがいも・さつまいも・里芋・ほうれん草。

高木地区は、1区画が6a程度の面積を県補助事業などを活用して、1区画を30a～80aに広げ、作業効率を上げ、機械の大型化により、労力の削減、経営規模を徐々に拡大し、平成18年に法人化した。

耕作地は、もともと水稻に適した土壌のため、さつまいもは加工が主である。

現在は80名程が作業に従事し、毎朝、作業の割り振りをして作業にあたっている。

作物は、グループに分けて、水稻・大豆・他の作物と輪作をしている。土壌にあったものを栽培して、収穫物はすべて農協に出荷し、加工品は農協を通じて食品メーカーへ供給している。

また、加工部門は、組合独自で直売所・道の駅・イベントなどに出品しているそうです。

地代は、10aあたり2,500円からと成田市に比べてかなり差があると思う。

今後の方針は、面積の拡大による集落協業経営や加工部門の充実、研修生の受け入れ、安定した雇用確保を進めていくそうです。

まとめまして、熊本県・鹿児島県・宮崎県の3か所を視察して、規模拡大するうえで、農地中間管理機構・人農地プラン・国庫補助事業などを上手く利用して、貸し手・借り手が互いに良い関係を保ち、契約栽培の取り組みも上手くいっている感じを受けました。

最後に自分の考えていることとして、農業全般に言えることですが、現在、将来、遺伝子組み換え・ゲノム編集と自然界の中では作り得ない作物、家畜と人間が長い間、食にして、人体には害が無いのだろうか。メリットがある以上、必ずデメリットは出てきてしまうのではないかと考えさせられるところがありました。

この視察研修をお世話して頂いた事務局、視察させて頂いた4か所の会社・組合には、大変感謝しています。ありがとうございました。

先進地視察研修レポート

成田市農地利用最適化推進委員 成毛 茂明

I. 有限会社 吉川農園

ここは、しそ（大葉）を生産・加工・販売（国内外）している農園でした。

ビニールハウスで周年栽培をして、国内及び海外のスーパーへ卸しているそうです。あの単価の低いシソの葉を売って1.8億円を稼ぎ出すのはすごいと思いました。しかも生葉の方が加工品よりも売上高が多いとのことでした。

それは、自家製配合ボカシ肥料を作り、各ハウスに計測センサーを開発し、出荷品質を向上させているからだということらしいです。



しそ栽培の様子 吉川農園HPより

II. 株式会社 くしまアオイファーム

さつまいもを生産から加工、販売まで一貫して行っている会社です。

自社農園が20haで他は契約農家が約100ha余りです。紅はるか・シルクスイート・安納芋等5品種を栽培しており、1,200t収容可能なキュアリング機能付きの貯蔵庫に保管して、周年出荷を可能にしています。

東京などの首都圏は、近隣の県にシェアを占められているため、輸出を考えたとそうです。それが今では、売り上げの4割が東南アジアを中心とした海外輸出ということで、今後さらに輸出を拡大していくとのことでした。棚からぼた餅のようです。会社から直接、小売店に商品を卸している点や海外輸出の増加が急成長の原因かと思われます。

Ⅲ. 農業生産法人 アネット有限会社

大きな特徴としては、さつまいもの苗の生産技術の確立と6次産業化の展開です。

さつまいもの栽培中に発生するウイルス病克服の為、新しく伸びかけた芽の先端0.5mmの生長点を切り取り、無菌の試験管培地で育てる方法を低コストで安定生産・供給するシステムを確立し、自社栽培の生姜を加工し、販売ルートを開発する等、生産・加工・販売に積極的に取り組んでいます。

また、ビニールハウス内部の農薬・液肥の散布や消毒・加湿冷房・温度湿度管理・日照時間管理の自動化システムの開発等技術面の開発が得意な会社です。

Ⅳ. 農事組合法人 きらり農場高木

構成農家数は343戸、耕作面積は約237haとかなり大きい組合です。

この人数・面積を上手くまとめ、水稻・馬鈴薯・ほうれん草など多品目を作物ごとに団地化し、ブロックローテーションで栽培している。

素晴らしい組合法人だと思いました。問題は、価格の低い作物を作っていることと地代・人件費を高く設定していることだと思います。



きらり農場高木にて

令和元年度先進地視察研修について

成田市農地利用最適化推進委員 高木 信利

今回の視察は、7月16日より2泊3日の日程で、熊本県・鹿児島県・宮崎県の農業先進地を訪問しました。

最初の視察先は、熊本県の吉川農園を訪問しました。

大葉の生産から加工まで、ハウスで周年栽培し、国内及び海外の高級デパートに輸出している農園です。

「農業は、やり方次第で必ず儲かる」をモットーにしているとおっしゃっていましたが、そう簡単に誰にでも出来ることでは無いと思いました。

視察2日目、鹿児島県のアネット有限会社を訪問しました。

「さつまいもメリクロン苗供給システムの確立」で、ウイルス病に強く、無菌状態で栽培された、さつまいものメリクロン苗を低コストで安定生産・供給することが出来るようになったという講演でした。

我々は、メリクロン苗のことをフリー苗と呼んでいましたが、フリー苗は普段から使用していたので、とても勉強になりました。

次に、宮崎県の株式会社くしまアオイファームに訪問しました。さつまいも専門の会社でした。

宮崎県は、首都圏の大消費地からは遠いため、千葉県や茨城県、ロシアなどと同じ土俵に立つのには、メリットが無いというのが現状です。そこで、逆転の発想で、海外に目を向け、出荷の多くを海外に輸出している会社です。

「独自ブランドによる直接販売」を行い、青果用さつまいもを自社農場に加え、契約栽培で生産し、独自ブランド化した5品種のさつまいもを国内流通、海外輸出に取り組んでいるそうです。

くしまアオイファームの周りを見た感じでは、山間部の畑や八ツ田ばかりで、宮崎県の中でも立地条件の悪いところで頑張っていると思いました。

視察研修3日目は、宮崎県の農事法人きらり農場高木へ訪問しました。

宮崎県の高木地区で生産を営む農家により、「農事組合法人きらり農場高木」を設立し、経営の多角化・複合化に取り組んでいました。

農家の高齢化と高齢者不足に悩む地域の農業を地域全体で守っていました。

自分の地域も考えるべきことだと感じました。

令和元年度先進地視察研修について

成田市農地利用最適化推進委員 根本 武志

熊本県合志市の吉川農園を視察させて頂きました。

大葉を主体とした作付けで、「土づくりは基本である」との思いから、緑肥導入の輪作体系をし、障害の回避に心掛けているそうです。

モニタリングとデータを活用しての栽培管理が素晴らしいと思いました。

坪単価を上げる農業を考え、生産品の良否により、生葉をカット葉、加工し、根以外は商品化する思いに関心しました。

また、商談会等に積極的に赴き、海外にも目を向けているそうです。

合志市農業委員会事務局長との意見交換では、農地の利便性を話し合い、集積したいとの話でした。また、農業委員14人中4人が女性であり、活躍を期待したいと思います。

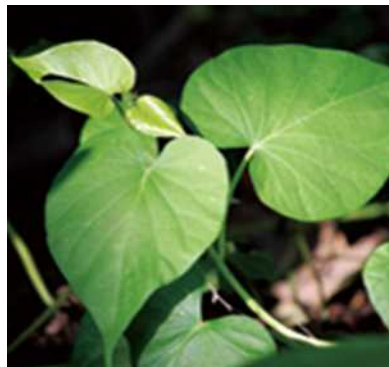
鹿児島県鹿屋市の農業生産法人アネットを視察しました。

イチゴ10種、さつまいも50種のフリー苗を生産し、全国に供給しています。また、さつまいもや生姜などの加工原料の製造を行い、供給しています。

育苗ハウスでは、海外からの最新の技術による温度管理や水分供給システムなど、人手を掛けずに安定した育苗施設があり、海外からの研修生を受け入れ、技術が広がっているそうです。私の今後の育苗の参考にしたいと思います。



イチゴ種苗



さつまいも種苗

アネット有限会社HPより

宮崎県串間市のくしまアオイファームを視察しました。

立地の悪い地域と収入の安定を考え、周囲の農家にも声を掛け、農協よりも高値での買取りをしているそうです。搬入された芋は、バーコードで管理されていました。芋の調整でも機械化による小労化と今後の有利販売を考えて、データを集めていることが素晴らしいと思いました。収入の安定と休日の確保のために、契約農家の自社員化を考えているとのことでした。

これからも周囲のさつま芋産地を集約化して、規模拡大を行い、キャラクターなどの擬人化による世界への発信を考えているとのこと、まだまだ発展していく会社だなと思いました。



貯蔵庫内の様子 くしまアオイファームHPより

宮崎県都城市農事組合法人きらり農場高木を視察しました。

水稻・馬鈴薯・さつまいも・大豆などの生産から加工販売までを行っている法人です。水稻転作のローテーションや作物区画を集約することにより、作業効率の向上と遊休農地の解消になっています。

広い年齢層を雇用することによって、担い手不足の解消にもなっています。また、JAや中間管理機構の利用も積極的に行っているそうです。

私の地域でも高齢化、担い手不足、遊休農地といった色々な問題があります。少しでも解消できるように活動していきたいと思います。

農業委員・推進委員の方々、事務局の方々、お疲れ様でした。

令和元年 成田市農業委員会先進地視察研修会に参加して

成田市農地利用最適化推進委員 土肥 昇

7月16日 有限会社・吉川農園…（代表取締役 吉川 幸人）

熊本県合志市地区に平成4年11月に設立された。この地区は、人口62,459人・農家戸数699戸である。吉川農園は、限られた経営耕地でいかに利益を上げるかを追求し、しそ（大葉）生産・加工・販売・販路拡大（海外進出）に取り組んでおります。すべての圃場に温度・湿度・日射量・ミネラル分などを計測するフィールドセンサーや生育状況を監視できるモニターカメラなどを使用し、リアルタイムにコントロールできる専用アプリなどICT・IT技術を活用した栽培管理の高度化に力を入れ、常に最適な栽培環境を実現しています。

もみ殻・ぬか・豚糞その他を使用した有機肥料栽培をしております。

また、しその規格や破れ、穴あき、虫被害等をチェックする自動選別システムを導入し、製造ライン・しそハウス栽培の面積が拡大したため、ハウスを6ヶ月～1年間休ませることが出来るようになり、坪単価が上がる農業が実現可能になったそうです。また、吉川幸人氏は、同業者と会議だけでなく、宴会等を多く設けることにより、地域農業耕作者と意思疎通を図り、お互いプラスになる農地集約を実現しているそうです。

これからの農業は、工業製品と同じように自分が栽培して収穫した作物は、自信を持って、小売価格を決めて売ることが大切とのことでした。

7月17日 農業法人アネット有限会社…（代表者 尾曲 修二）

鹿児島県 鹿屋市東原町に所在し、平成11年4月に設立された。

従業員12人で、農産物の生産・加工・販売や種苗（生姜・さつまいも・ゴーヤ・イチゴ）を生産しており、近年、バイオ工場を設立し、いちご・にんにく・生姜などを全国へ供給しています。特に、さつまいも品種50種のバイオ苗供給は、全国一を誇ります。イスラエルで開発されたハウス用ビニールハウスは、光を散乱させるので、ハウス内の温度が上がりにくく、中はカーテンで仕切られていました。また、韓国で開発された育苗機を使用して、さつまいも・いちご苗の生産を始めるそうです。常日頃、私たち農家が栽培している作物の苗も今後アネット有限会社の種苗を使用することが多くなるのではないかと思います。

7月17日 農業生産法人 株式会社くしまオイファーム

…（社長 池田 誠）

宮崎県 串間市は、人口17,480人、農家総数1,241戸の一次産業が中心です。

若者は、都市部に流出していくという典型的な過疎地域を自分の力で農業全体を変えることを決意し、さつまいものグローバル展開を掲げて、2013年12月に法人化し、さつまいもの生産・加工・販売を一貫して行っている。

平成22年から、市場出荷から直接販売に転換したことにより、自社農園20haの他に周辺の農家とも契約を結び、安定した生産体制を構築して、消費者が購入しやすいという「おやついも」（小型さつまいも）を開発し、小畦密植栽培法により、販売価格と契約農家への利益還元を両立していました。

さつまいもを合計15,000t以上貯蔵可能な貯蔵庫によって、出荷量が調整することができ、新設した貯蔵庫は、高温多湿の条件を保つ「キュアリング機能」で、傷が付いたさつまいもの自然治癒ができるそうです。その後、低温貯蔵庫において、長期熟成させることで糖度を高めることができ、契約農家から仕入れたさつまいもを品質の高いものとして出荷しているとのことでした。

今後は、東南アジアを中心に海外輸出に力を入れていくとのことでした。

理由として、宮崎は東京などの大消費地から遠く、近隣の千葉県・茨城県にシェアを占められていたため、国内はもとより海外への輸出に向けて販路拡大し、現在はシェアの80%を占めるようになりました。

立地状況の良いところと競うのではなく、海外輸出に重点を置いたことが、成功に繋がったと思います。

※ 職場環境として、職員を差別のない独自の評価制度をつくっている。

※ 次期社長を職員による選挙で選出することに驚きました。

（奈良迫 洋介 氏 に決定）



くしまオイファームにて

7月18日 農事組合法人 きらり農場高木

…（代表理事組合長 松原 照美）

宮崎県 都城市高木地区は高齢化が進む中で、後継者不足や耕作放棄地などが増加し、農地を預けたいという農家が多くなったことから、地域農地の受け手・担い手として、平成18年4月に同法人が設立されました。

当初は、18haの水田から開始し、年々増えて、現在は、構成農家戸数317戸、農地面積205haまで拡大しています。その他に作業受託の田植え1ha、収穫13ha、防除296haも行っています。

生産する作物は、水稻・馬鈴薯・大豆・さつまいも・里芋・ほうれん草で、転作によって、田の使用が二回転、作物によっては三回転可能になり、土地利用率が非常に良くなったそうです。

収穫した作物は、JA都城へ出荷しており、法人化によって、会社・労災保険・厚生年金・退職金制度を完備したということで、30代から40代の就農希望者が多いということは、若い世代が魅力を感じているからだと思います。

また、毎朝、職員と作業前にミーティングを行い、作業に優先順位を決めてから作業分担し、仕事を始めるそうです。

毎日の仕事に計画を立てて行うことは、どの職業であっても、とても大切なことだと思います。

※ 稲の幼苗をJAより1箱500円で購入している。

※ 成田市管内で、稲作・畑・園芸栽培において、将来、きらり農場高木のような農業組合法人を参考にして、地域農業耕作者と協力し、運営されることを望みます。



きらり農場高木にて